

(3) 昭和49年1月10日 第145号

ノクール入賞作品 九州コ一  
ス 欽井手本治氏(北海道)

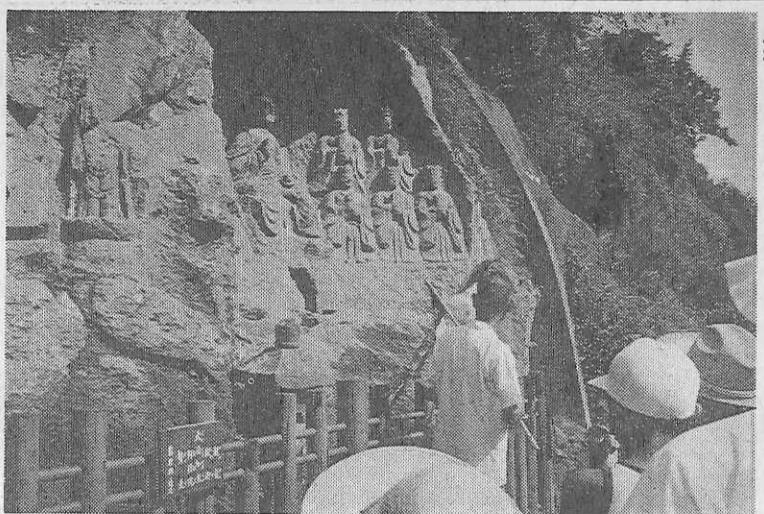
四八年度研修旅行写真コンクール入賞作品 九州コ一  
ス 欽井手本治氏(北海道)

会が年々盛大の一途をたどり、ことは、一に理事長以下役員の尊常ならざる熱意の賜であり、うより他にいう術(すべ)を知らない。改めて関係者に敬意を表す

筋に專念し続いた精神の帰結といふに至つて、この年は、甲寅(こうとねん)の協力精神の結晶であり、この途筋に専念し続いた精神の帰結といふに至つて、この年は、甲寅(こうとねん)の尊常ならざる熱意の賜であり、うより他にいう術(すべ)を知らない。改めて関係者に敬意を表す

る次第です。

今年は甲寅(こうとねん)、甲は「はじめ」とも訓じられ、寅は「協力」「進展する」意を含むといわれる。新しい年を迎えてわれわれ関係者一同がその意味する初心を想起し、進展のための協力を誓いあうことでもまた必要があり、意義あることではなかろうか。一段の發展を祈念してやみません。(全修協新潟県支部長・新潟県教職員厚生財団理事長)



## 新春を迎えて

まないものであります。(全修協)

国土への愛を  
高田 治郎  
理事会・北海道支部長

初心にかかる  
徳橋 新次  
創設十九年目を迎えた当研究協

新年おめでとうございます。  
昨年は石油ショックを契機にし  
て世情騒然たるものに暮れました。  
た。本年はまさに不況下の物価高  
・倒産など暗い世情と思いますが  
この時こそ高きに全修協運動を  
進めるべきだと思います。

修学旅行では日本の自然歴史  
を通じて、次の青少年に夢と希望をもたらせるものであり、そのため積極的に行動するのが全修協であるからです。

実力の発揮へ  
西山 文男  
明けましておめでとうございま  
す。

石油がないとなる今さきのよ  
にわたり、五回目の外遊をしま  
たが、これらを通じて思うことは  
われわれもまた日本の國土、風  
物伝統に対して理解を深め、認  
識を高めるべきだと思います。一人  
を企画し、実践する教師にとって  
多くの出来事の出来事があ  
ると思います。

昭和四十九年の新春を迎えて  
昭和四十九年の新春を迎えて  
過去の全修協の功績と努力体制  
となり肉となるように期待してや  
が今後の課題解決に十分の力を発

まらないものであります。(全修協)  
全修協青森県支部の四十九年度  
における研修旅行参加者は百名を  
越した。このことは全修協企画の  
この旅行が教育界に定着し、その  
実績と成果が教職員から認識され  
ている証左であると思づ。

支那第一以来これまで十六年、  
修学旅行が単に交通機関を利用し  
て旅館に泊り、土産物を買ったこ  
とだけの思い出にとまらぬよう  
の場を教職員に提供する「研修旅  
行」の運営を始めたのが最初で、  
われわれの生活への波及の早  
さ、大きさを感じさせられます。  
しかし、こんな時代の浅まじみとせつづけられ  
て、われわれの生活への波及の早  
さ、大きさを感じさせられます。  
伊予の松山、お城の中にや  
くせがある。また、天罰と見  
向へ前後のわきまえもなく笑走る  
修協もますますその特色を發揮さ  
れることを祈念するだけである。

また、教職員の研修旅行は、十  
数年らしい実績の上に立って、さ  
らに内容の充実した企画で呼びか  
ける必要があり、この両者これが  
ともに新しい年への期待である。  
伊予の松山、お城の中にや  
くせがある。また、天罰と見  
向へ前後のわきまえもなく笑走る  
修協もますますその特色を發揮さ  
れることを祈念するだけである。

（全修協中央研修部幹事・財團法  
人会議会議長）

新幹線の開通を目前に、その周到  
な社会情勢の変化とともに需要  
件が重なり合つて事業の遂行には  
難關が横たわることが想像されま  
すが、われわれはそれらの障害を  
のりこえて修学旅行の教育価値を  
再び見直し、また指導者育成の方  
面で見直し、そのための教職員研修旅行の完全実施を  
めざして努力を重ねたいと思って  
おります。

修学旅行については国鉄の東北  
新幹線の開通を目前に、その周到  
な社会情勢の変化とともに需要  
件が重なり合つて事業の遂行には  
難關が横たわることが想像されま  
すが、われわれはそれらの障害を  
のりこえて修学旅行の教育価値を  
再び見直し、また指導者育成の方  
面で見直し、そのための教職員研修旅行の完全実施を  
めざして努力を重ねたいと思って  
おります。

（全修協中央研修部幹事・財團法  
人会議会議長）

（全修協中央研修部幹事・財團法  
人会議会

## 新春を迎えて

### 生きた勉強に

高橋 禹

在学中、最も待ち、期待をかけたのが「修学旅行」である。平常校内での勉強に少からぬ神経をつかいつくしてい生徒など、それぞれ広げて、生きた勉強する「修学旅行」であるしかも「全修協」は、あらゆる細密なる計画を作製してくれ、それに乘かって素直に旅行が出来るので

(全修協秋田県支部長・秋田県

新年おめでとうございます。  
今年も全修協の飛躍的発展を期  
待いたします。それはいまさらい  
う必要ありませんが、意義ある

旅のモラルを  
育委員会教育委員長

の二十一世紀に躍進する日本人像  
を確立する基がひそんでいます。  
います。  
「目的ある旅を」(全修  
協京都部長・東京都中野区教  
協理事)

修学旅行の時から、旅のモラル  
金修協が新しい年慶じてなれて  
企画された旅行計画は、国内・海  
外ともにコースが拡張され、しか  
もその地方の特殊性が生かされて  
いる旅行であることは参加者に  
ては誠に心地よいことであ  
ります。とくにその内容において  
は、その地の天然の美、自然の趣  
味が十分に取り入れられ、また、  
その地の文化のよってくる歴史の  
跡の探究される機構が入って、総  
合的関係、横の関係ともに備わった  
計画であるため価値高い旅行が約  
束されるであらう。

新年を迎えて全修協の発展を期  
する道あります。

(全修協山口県支部長)

価値高い旅行

開地 茂行

かしい望み多き新年を迎えて  
おろこびいたします。

旅の恥はかきす  
めようとすれば七〇を越える以前

時代の寺院跡が残されているよう  
に大和に接近しているためか文化

の进入が比較的早かったことが立  
証している。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川

橋梁を渡るともう名張盆地であ  
る。万葉集に「わがせこほい

國也。麦米も出来 兵糧に事欠く  
べからず、一國堅固、七口に功者

なる鐵砲頭七人に五十挺す差加  
付近は黒田忠興で、名高い東大寺伊  
賀黒田庄で、線路の左右は最盛  
時三百町歩を超える広大な庄園で  
あったとい。

手取の乱(六七〇)に際し領主の  
旗上げのため大海上皇子の一  
行が大野(近鉄室生口・大野駅付  
近)を経て伊賀に入つたことが日  
本書紀にみる。

伊賀国は四面山の国である。改  
めようとすれば七〇を越える以前

西から行くと伊賀国は海神社の  
三本松駅を過ぎて第一守院川